

4章 イスラーム世界帝国の形成

問題

【1】

解答

問1 1 k 2 o 3 h 4 n 5 m

問2 A a B j C r D i E k F v G w H u
I g J x K e L p M b N y O m

問3 c 問4 c・d 問5 d・e 問6 d 問7 b・e 問8 c・d

解説

オスマン帝国の成立から最盛期までの領土拡大についてまとめられている。どのスルタンの時代に、どこまで領土が拡大しているか、年代・地図と併せて確認しておこう。空欄補充は基本的な内容だが、正誤判定は踏み込んだ内容が問われているものも散見される。難関私大入試では正誤判定で差がつきやすいので、誤ったところはしっかり確認しておいてほしい。

- 問1 1 バヤジット1世は、ヨーロッパに対してはジギスメント率いる連合十字軍を破り、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルの包囲を試みるなど優勢に立ったが、1402年アンカラの戦いでティムールに破れ、捕らえられた後病死した。これにより、オスマン帝国は1413年まで空位時代となった。
- 2 メフメト2世は、1453年にコンスタンティノープルを陥落させ、ビザンツ帝国を滅ぼした。オスマン帝国の首都はコンスタンティノープルに移され、イスタンブルと改称された。
- 3 セリム1世は、1514年にサファヴィー朝を破り東アナトリア領を獲得し、1517年にはカイロを攻略してマムルーク朝を滅ぼし、メッカ・メディナの支配権を獲得した。
- 4 ミマーリ＝シナンはオスマン帝国最盛期の建築家で、イスタンブルのスレイマン＝モスクを建てたことで知られる。
- 5・問2－L・M・N スルタン直属の奴隷軍団の中でも、イエニチェリと呼ばれる歩兵軍団は強力な軍事力を保持し、オスマン帝国の軍事の支柱となった。兵士はキリスト教徒の子弟をイスラーム教に改宗させ、訓練を施すデウシルメ制と呼ばれる制度に基づいて徴用された。しかし、のちに特権集団化して腐敗が進んだため、1826年、マフムト2世によって廃止された。
- 問2 A ムラト1世は、1362年にビザンツ帝国からアドリアノープルを奪取した。トルコ語ではエディルネと呼ばれ、1453年にコンスタンティノープルに遷都するまで、オスマン帝国の都となった。
- B ムラト1世は、1389年のコソヴォの戦いでセルビア・ボスニアなどのスラヴ人勢力を破り、これらの地域へのトルコ人の移住を進めた。
- C 1396年のニコポリスの戦いで、ハンガリー王ジギスメント率いるバルカン諸国・フランス・ドイツ・イギリスの連合十字軍は、オスマン帝国に敗れた。ニコポリスはブルガリア北

部の都市である。

- D キプチャク = ハン国の分家であるクリム = ハン国は、15世紀末にオスマン帝国の保護国となった。
- E サファヴィー朝は、16世紀初頭にシーア派を国教としてイランに成立した。スンナ派を奉じていたオスマン帝国と対立し、1514年のチャルドランの戦いに敗れて東アナトリア領を奪われた。
- F マムルーク朝は、エジプト・シリアを支配し、十字軍やモンゴル軍を撃退したが、1517年にはオスマン帝国にカイロを攻略されて滅びた。
- G スレイマン1世は、1526年のモハーチの戦いでハンガリー王ラヨシ2世を破り、ハンガリーに支配圏を広げた。以後17世紀末まで、ハンガリーの主要地域はオスマン帝国の支配下に置かれた。
- H 1538年のプレヴェザの海戦において、オスマン帝国はローマ教皇・神聖ローマ皇帝らの連合艦隊を破り、クレタ・マルタを除く全地中海域の制海権を掌握した。
- I オスマン帝国はフランス、イギリス、オランダなどに対し、領事裁判権を含む通商特権を認めたカピチュレーションを与えた。
- J 1571年のレパントの海戦において、オスマン帝国はスペイン・ヴェネツィアらの艦隊に敗れたが、なお東地中海の制海権を維持した。
- K オスマン帝国では、アッラーが定めたとされるイスラーム法（シャリーア）を補うものとして、スルタンの勅令や慣習法をカーヌーンとして成文化した。

問3 正解はc。セルビアはコソヴォの戦いで敗北し、以後1878年のサン＝ステファノ条約で独立するまでオスマン帝国の支配下に置かれた。

- a セルビア王国は、14世紀前半にバルカン半島の北部を統合した。
- b コソヴォの戦い以降、ドナウ川以南のバルカン半島はオスマン帝国の支配下に置かれた。
- d 西欧各国に「トルコの脅威」を意識させたのは、1529年のウィーン包囲など、主にスレイマン1世の治世下においてである。

問4 正解はc・d。アンカラの戦いでティムールに敗れたバヤジット1世が病死した後、オスマン帝国は空位時代が続き、滅亡の危機に瀕した。ティムール朝は一時小アジアまで支配を広げたが、16世紀初頭にはウズベク族によって滅ぼされた。

- a・b 上記解説を参照。
- e この戦いにスペインを中心とする連合艦隊は参加していない。

問5 正解はd・e。スレイマン1世は、フランスのフランソワ1世と同盟を結び、ともにハプスブルク家出身の神聖ローマ皇帝カール5世と対立した。フランソワ1世はレオナルド＝ダ＝ヴィンチを保護するなど、芸術を奨励し、“フランス＝ルネサンスの父”と呼ばれた。

- a 上記解説を参照。
- b スレイマン1世治世下のオスマン帝国は、中央集権体制に基づく統治が行われた。
- c スレイマン1世は「立法者」を意味するカーヌーニーと呼ばれた。カーディーはイスラーム法に通じ、地方行政も担った裁判官のことで、主にウラマーが就任した。

問6 正解はd。オスマン帝国は関税収入、および首都イスタンブルへの穀物などの供給を目的として貿易を保護・奨励し、フランス、イギリス、オランダなどにカピチュレーションを

与えて異教徒の通商活動を保護した。

- a 16世紀にカピチュレーションを付与された国以外にも、18～19世紀にオーストリア・ロシア・プロイセン・合衆国なども同様の特権が約された。
- b 18世紀以降オスマン帝国が衰退すると、カピチュレーションは西欧諸国にとって有利な不平等条約として解釈され、侵略が進められた。
- c カピチュレーションには租税免除も含まれた。
- e カピチュレーションは主にキリスト教徒に対して与えられたもので、イスラーム教への改宗は必要ではなかった。

問7 正解はb・e。レバントの海戦時のスペイン国王はフェリペ2世である。彼は1580年にポルトガルの王家断絶に乗じてポルトガルとその海外領土を併合し、“太陽の沈まぬ国”となった。宗教面ではカトリック政策を強行したため、ネーデルラントの新教徒が反発を強め、北部7州はユトレヒト同盟を結成して抵抗、1581年には独立を宣言した。

- a ハプスブルク家最初のスペイン王は、フェリペ2世の父カルロス1世である。
- c ルイ14世の孫はフェリペ5世である。
- d 上記解説を参照。

問8 正解はc・d。オスマン帝国は、キリスト教徒やユダヤ教徒に対しては、徴税に協力すれば自治を認めた。

- a 上記解説を参照。
- b 上記のキリスト教徒やユダヤ教徒に対する対応からもわかる通り、多神教の宗教に限って寛容であったのではない。
- e ミットトの制度はオスマン帝国時代に制定された非イスラーム教徒の共同体である。

【2】

解答

問1 1 ガズナ朝 2 ムガル帝国 3 マラーター王国

問2 (1) アウラングゼーブ (2) シヴァージー 問3 (ア) デリー

問4 トルコ人を中心とする白人奴隷のことで、アッバース朝以降軍事力の中核となり、次第に政治的実権も握った。(50字)

問5 ・ジズヤの廃止などヒンドゥー教徒に対する宗教的寛容政策を採った。

・全国を州・県・郡に分け、中央から派遣した官吏に統治させた。

・全国の土地を測量して徴税制度を整備した。

問6 イスラーム・ヒンドゥー両教を融合したナーナクによって開かれ、偶像崇拜とカーストを否定し苦行を禁じた。(50字)

解説

ガズナ朝・ムガル帝国・マラーター王国をそれぞれ短文で取り上げた問題。論述問題もあるが、いずれも50字以下の短いものなので、間違えることを恐れず積極的に書いてみてほしい。

問1 1 962年にサーマーン朝の総督であったトルコ系マムルークのアルプテギンが、アフガニスタン初のイスラーム王朝であるガズナ朝を建国した。ガズナ朝はインドへの侵入を繰

- り返し、インドのイスラーム化を促進したが、12世紀にセルジューク朝とゴール朝によって滅ぼされた。
- 2 1526年にバーブル（位1526～30）がデリーを都にムガル帝国を建国した。第3代のアクバル（位1556～1605）は北インドを統一し、内政を整えた。第5代のシャー＝ジャハーン（位1628～58）の時代には文化も最盛期となった。彼は優れた建築物であるタージ＝マハルを建造した。第6代のアウラングゼーブ（位1658～1707）は帝国の版図を最大にしたが、宗教的に不寛容な政策を採り、シク教徒やヒンドゥー教徒の反抗を招いた。以後、帝国は衰退し、イギリスによって19世紀後半に滅ぼされた。
- 3・問2-(2) マラーターはヒンドゥー教を奉じ、農業に従事するカースト集団である。17世紀中頃にマラーターの指導者であるシヴァージーがマラーター王国を建国した。彼の死後、その勢力は一時衰えたが、諸侯がマラーター同盟を作りムガル帝国と争った。しかし18世紀後半からの3回にわたるマラーター戦争でイギリスに敗れ、その支配下に入った。
- 問2 (1) アウラングゼーブは外征を行い、デカン高原の大部分を支配下に入れた。その一方で、彼は厳格なスンナ派イスラーム教徒であったため宗教的には不寛容な政策を採り、ジズヤを復活させるなどしたため、ラージプート族・シク教徒・マラーター族などの反抗を招いた。また、たび重なる外征は帝国の財政も圧迫し、彼の死後、帝国は衰退へと向かった。
- 問3 バーブルが都を築いたデリーはガンジス川の支流の沿岸部にあり、政治的・軍事的に重要な地であった。デリー＝スルタン朝もデリーを都とした。
- 問4 マムルークはトルコ人・スラヴ人・ギリシア人などを中心とした白人奴隷のことである。アッバース朝以後、親衛隊として用いられるなどイスラーム諸王朝の軍事力の中核となった。しかし次第に政治的実権も握るようになり、恣意的にカリフの廃立を行うものが現れた。また、1250年に建国されたマムルーク朝のように、カリフの支配から自立して独自の勢力を築くものも出現した。
- 問5 アクバルは北インドを統一するとともに、アグラに遷都して内政を充実させた。全国を州・県・郡に分け、中央から派遣した官吏に統治させて、中央集権化を進めた。また、全国の土地を測量して土地の面積に応じて課税することとし、徴税制度を整えた。宗教的には寛容な政策を採り、非イスラーム教徒に課した人頭税のジズヤを廃止し、とくにヒンドゥー教徒との融和に努めた。
- 問6 16世紀初め、ナーナクはヒンドゥー教（バクティ信仰）をベースにイスラーム教（スーフィズム）を融合させ、シク教を開いた。シク教は一神教的で、偶像崇拜とカーストを否定し、苦行を禁止した。ムガル帝国の迫害を受けたが、パンジャブ地方を中心に広まり、一大教団勢力に発展した。19世紀半ばに2回にわたって行われたシク戦争に敗れ、イギリスの支配下に入った。

【3】

解答

問1 a ビザンツ b マムルーク c スンナ d イスマーイール1世
e シーア f ジズヤ g シク h ウルドゥー

問2 聖都の名称：メッカ・メディナ

理由（メッカ）：預言者ムハンマドが誕生した地であり、イスラーム教信仰の中心であるカーバ神殿を擁しているため。(46字)

理由（メディナ）：ヒジュラによりムハンマドが移住してウンマを成立させた地であり、ムハンマドの墓廟を擁しているため。(48字)

問3 形式主義を排し、神との一体化を求める信仰。一般民衆も受け入れやすい内容であったため、イスラーム商人の活動を介して、世界各地域へ普及した。(68字)

問4 ジズヤの復活を初め、ヒンドゥー教徒など非イスラーム教徒への弾圧策により、各地勢力からの反発を招き、領土拡大のための外征で財政難に陥った。(68字)

解説

オスマン帝国・ムガル帝国・サファヴィー朝は、同時期に並び立ったイスラーム帝国として、たびたび同じ問題の中で取り上げられる。成立や領土拡大の経緯、特徴的な統治制度などについては、今回のような短文論述で出てもまとめられるようにしておこう。

問1 a メフメト2世は1453年にコンスタンティノープルを攻略し、ビザンツ帝国を滅ぼした。コンスタンティノープルはイスタンブルと改称され首都が置かれた。

b セリム1世は1517年にエジプトのマムルーク朝を滅ぼし、メッカ・メディナの支配権を獲得した。

c～e オスマン帝国はスンナ派を奉じたが、1501年にイスマーイール1世によって立てられたサファヴィー朝はシーア派を国教としたため、両者はたびたび対立した。

f アクバルは非イスラーム教徒に課されるジズヤを廃止したほか、ヒンドゥー教徒の王女を妻にするなど、異教徒の懐柔策を行った。

g ナーナクによって開かれたシク教は、ヒンドゥー教（バクティ信仰）とイスラーム教を融合させた新宗教であり、パンジャブ地方を中心に普及した。

h ウルドゥー語は北インドの口語にアラビア語・ペルシア語が融合した言語で、現在のパキスタンの国語となっている。

問2 イスラームの聖地として、メッカ・メディナの名前は押さえていても、聖地としての由来を記述するのはあまりなじみがなく、とまどった方も多かっただろう。

ムハンマドの出身地であるメッカは、古くより宗教都市として栄えていた。カーバ神殿は、アラビア半島古来の多神教の中心でもあり、聖像なども収められていた。ムハンマドのメッカ征服後はイスラーム教の信仰の中心とされ、偶像崇拜禁止の教義により、聖像などは撤去・破壊されて壁にはめこまれた黒石だけが残された。

ムハンマドはメッカで預言者としての自覚を得てイスラーム教を創始したが、当時メッカを支配し、カーバ神殿の守護権を得ていたクライシュ族の迫害を受け、メディナに移住して信者の共同体であるウンマを成立させた。これをヒジュラと呼び、ヒジュラが行われた622

年はイスラーム暦元年となっている。ムハンマドは630年メッカを奪回したが、632年にメディナで病没した。ムハンマドの墓廟を擁するメディナは、メッカに次ぐイスラームの聖地となっている。

問3 スーフィズムは、禁欲的な修行によって神と一体化することを求めるもので、神秘主義とも呼ばれている。スーフィズムは教義についての難解な解釈や形式主義を排したため、民衆にも受容されやすく、高名な修行者を崇拜の対象として、多くの神秘主義教団が作られた。このようにしてイスラームの民衆への浸透が進み、イスラーム商人の活動範囲の拡大とともに、インド・東南アジア・中央アジア・中国・アフリカへもイスラーム教が普及した。

問4 アウラングゼーブは厳格なスンナ派イスラーム教徒であったため、シーア派や、ヒンドゥー教徒など非イスラーム教徒に対して弾圧を行った。1679年には、アクバルが廃止したジズヤを復活させ、ヒンドゥー教の寺院を破壊するなどの圧迫を加えたため、異教徒らの反発を招いた。アウラングゼーブは外征に注力し、ムガル帝国の最大の版図を獲得したが、ラージプート族・シク教徒・マラーター族など諸勢力との抗争が相次ぎ、軍事費が増大して財政が悪化した。

【4】

解答

問1 1 c 2 b 3 c 4 e 5 d 6 b 7 a 8 c
9 a 10 e 11 a 12 a

問2 a 問3 b 問4 e 問5 e 問6 b 問7 e 問8 b

解説

上智大としては平易なレベルの問題。やや細かい用語も散見されるが、同大学の志望者であれば確実に正解したい問題である。

問1 1 メフメト2世は1453年にコンスタンティノープルを陥落させてビザンツ帝国を滅ぼし、この地に遷都してイスタンブルと改称した。

2 十二イマーム派は第4代正統カリフであるアリーとその妻の直系12人のみを真の指導者(イマーム)と考える宗派で、シーア派の主流を成す穏健派である。

aのイスマーイール派はシーア派の中でも過激派に属し、ファーティマ朝の国教とされた。cのドルーズ派はイスマーイール派の分派。dのハワーリジュ派は正統カリフ時代に形成された分派で、アリーを暗殺した。eのワッハーブ派は18世紀中頃に形成されたイスラームの改革派である。

3 タブリーズはアゼルバイジャンの都市で、サファヴィー朝の最初の都となった。

aのアレッポはシリア北部の都市で、オスマン帝国の支配下で繁栄した。bのカーブルはアフガニスタンの首都で、ムガル帝国の創始者バーブルのインド侵入の拠点となった。dのテヘランはイランの都市で、カージャール朝やパフレヴィー朝の都が置かれた。eのブハラは中央アジアで通商を担ったソグド人の商都として繁栄した。

4 セリム1世は1517年にマムルーク朝を滅ぼし、メッカ・メディナの支配権を獲得した。

5 スレイマン1世はフランス王フランソワ1世と同盟を結び、神聖ローマ帝国を初めとする

西欧諸国を圧倒した。

- 6 キジルバシュは、サファヴィー朝建国の礎となった神秘主義教団を支えたトルコ系の遊牧民で、王朝成立後に特権階級を形成して内紛を繰り返したが、アッバース1世に平定された。

aのイエニチェリはオスマン帝国のスルタン直属の常備歩兵集団、cのシパーヒーはオスマン帝国に徴税権を付与されて仕えた騎士（東インド会社が編成したインド人傭兵も同名で呼ばれる）、dのティマールはオスマン帝国が騎士に与えた徴税権、eのホージャはイスラーム世界において富裕な商人・学者などをさす尊称である。

- 7 13～16世紀にかけてインドを支配したデリー＝スルタン朝のうち、ロディー朝のみがアフガン系、奴隷王朝・ハルジー朝・トゥグルク朝・サイイド朝はトルコ系である。

- 8 バーブルは1526年のパーニーパットの戦いでロディー朝を破り、デリーを占領してムガル帝国を建国した。

aのカーナティック戦争は18世紀のイギリスとフランスによる南インドでの植民地をめぐる抗争、bのグルカ戦争は19世紀のイギリスがネパールを征服した戦い、dのブラッシーの戦いは18世紀にイギリスがフランス・ベンガル連合軍を破った戦い、eのマイソール戦争は18世紀にイギリスがマイソール王国を破った戦いである。

- 9 アクバルは1558年アグラを首都と定めた。アグラ近辺にはタージ＝マハルなどの壮麗な建築が今も残っている。

- 10 ホルムズ島はペルシア湾口に位置する軍事・交易の拠点であり、1622年にサファヴィー朝がポルトガルから奪回した。

- 11 1699年のカルロヴィッツ条約で、オスマン帝国はハンガリー主要地域などをオーストリアに割譲し、以後ヨーロッパにおける勢力を失墜させていった。

- 12 サファヴィー朝は1722年にアフガン人の攻撃を受け、36年に滅びた。

問2 1402年のアンカラの戦いでオスマン帝国はティムール朝に破れ、バヤジット1世が捕らえられた。以後オスマン帝国は空位時代が続き、滅亡の危機に瀕した。

bのコソヴォの戦いは1389年にムラト1世がセルビアなどのバルカン半島勢力を破った戦い、cのニコポリスの戦いは1396年にバヤジット1世がハンガリー王ジギスムント率いる連合十字軍を破った戦い、dのニハーヴァンドの戦いは642年に正統カリフ時代のイスラーム勢力がササン朝を破った戦い、eのモハーチの戦いは1526年にスレイマン1世がハンガリーを破った戦いである。

問3 イスラーム神秘主義教団とは、神との一体化や内面の救済を重視するスーフィズム（神秘主義）を信奉する教団である。難解な教義を排したため民衆の支持を得て、高名な修行者を聖者として崇拝した。

問4 スレイマン1世はマムルーク朝を滅ぼしてエジプトからアルジェリアにかけてのアフリカ北岸を支配したが、モロッコは勢力範囲外であった。

問5 アクバルは、すべての官僚をマンサブ（位階）で序列化し、各々のマンサブに応じた騎兵や騎馬の準備を義務付けて給与を与えるマンサブダール制を定めた。

aのイクター制はブワイフ朝が創始し、セルジューク朝によって整備されて多くのイスラーム王朝で採用された軍人・官僚への俸給に見合う土地の徴税権を与える制度、bのザミンダール（ザミンダリー）制は18世紀末以降イギリスがインドで実施した土地税徴収制度、

cのティマール制はオスマン帝国が騎士に対して徴税権を与える制度、dのデウシルメ制はオスマン帝国の兵員を、キリスト教徒の子弟から徴用する制度である。

問6 第3代アクバル(ジズヤの廃止, 異教徒に対する寛容策)→第4代ジャハーンギール(寛容策を踏襲)→第5代シャー=ジャハーン(タージ=マハルなどインド=イスラーム文化の最盛期を現出)→第6代アウラングゼーブ(ジズヤ復活, 異教徒弾圧, ムガル帝国の領土最大)のように, 皇帝の順番と主要な事績についてはセットで押さえておきたい。なお, ファルローシャーは第2代ムガル皇帝で, 周辺王朝との抗争に敗れてサファヴィー朝に亡命した。

問7 ナーナクはヒンドゥー教をベースにイスラーム教の要素を取り入れたシク教を創始し, シク教はパンジャブ地方を中心に広まった。

aのアイバクは13世紀初頭の奴隷王朝の創始者, bのカビールはヒンドゥー教とイスラーム教の融合をはかってナーナクに影響を与えた人物, cのシヴァージーはマラーター王国を建国してアウラングゼーブに対抗した人物, dのティラクは19世紀末~20世紀初頭のインド独立運動の指導者である。

問8 サファヴィー朝滅亡後, イランにはアフシャール朝やザンド朝などの諸王朝が興亡したが, 18世紀末にカージャール朝が統一政権を成立させた。

【5】

解答

1 ハ・ホ 2 ロ・ハ

解説

オスマン帝国・サファヴィー朝・ムガル帝国を取り上げた正誤判定問題。誤っている箇所を的確に指摘した上で, 正しい文章に直すことができるような学習を, 日々心掛けたい。

1 イ バヤジット1世(位1389~1402)は, 1396年のニコポリスの戦いでハンガリー王ジギスムント(位1387~1437, 神聖ローマ皇帝;位1411~37)の率いるヨーロッパ連合軍を撃破したが, その後, アンカラの戦い(1402)でティムール朝に完敗して捕虜となり, 翌年死去したため, オスマン帝国は滅亡の危機に直面した。

ロ メフメト2世(位1444~45, 45~46, 51~81)は1453年にコンスタンティノープルを落としてビザンツ帝国を滅ぼし, エディルネ(かつてのアドリアノープル)からコンスタンティノープル(現在のイスタンブール)へ遷都した。ブルサはエディルネに遷都する以前の都である。また, クリム=ハン国は黒海北岸の国。

ニ ディウ沖海戦(1509)は, ポルトガルがマムルーク朝を破った戦いである。スレイマン1世(位1520~66)は, 1526年のモハーチの戦いでハンガリーを破り, 1529年には神聖ローマ帝国の首都ウィーンを包囲するなど, ヨーロッパに脅威を与えた。1538年のプレヴェザ海戦ではヨーロッパのカトリック連合軍を破り, 地中海の制海権を掌握した。

2 イ サファヴィー朝の最盛期を現出した第5代シャーのアッバース1世(位1587~1629)は, ポルトガル人勢力をホルムズ島から駆逐した。

ニ ムガル帝国の第5代皇帝シャー=ジャハーン(位1628~58)は, アグラの東にタージ=マハルを建立した。

ホムガル帝国の第6代皇帝アウラングゼーブ（位1658～1707）に反抗したマラーター王国は、パンジャブ地方ではなくデカン高原を拠点とした。

【6】

解答

設問1 1 セム 2 ムアーウィヤ 3 ブワイフ 4 スルタン 5 カイロ

設問2 う・か 設問3 啓典の民 設問4 シーア派, う

設問5 ホラーサーン地方 設問6 インド＝ヨーロッパ語族, お

設問7 タラス河畔の戦い, 唐 設問8 アルタイ語族, う 設問9 ティマール

解説

イスラーム教の創始からオスマン帝国までのアラブ人の歴史を概観した問題。イスラーム教では民族系統は問われやすいところなので、もう一度しっかり確認しておいてほしい。

設問1 1 アラブ人は、西アジアから北アフリカ一帯に居住し、古代メソポタミア文明を担ったアッカド人、アラム人、ヘブライ人などと同じセム語系であるとされる。

2 ムアーウィヤは第4代正統カリフであったアリーと対立し、アリーが暗殺された後にカリフを称してウマイヤ朝を開いた。

3 ブワイフ朝はイラン系シーア派王朝で、946年バグダードに入り、アッバース朝カリフから大アミールとしてイスラーム法を施行する権限を与えられた。

4 セルジューク朝はブワイフ朝を倒し、アッバース朝カリフからイスラーム世界の世俗君主を意味するスルタンの称号を受けた。スルタンの称号は以後のスナ派王朝へ継承された。

5 マムルーク朝はアッバース朝の滅亡後、アッバース朝カリフの末裔を新しいカリフとして首都カイロに擁立し、メッカ・メディナの支配権を得た。

設問2 六信はアッラー・天使・コーラン・預言者・来世・天命を信じること、五行は信仰告白・礼拝・断食・喜捨・巡礼の義務である。

設問3 ムハンマドがユダヤ教・キリスト教の預言者を、自らに先立つ預言者として認めたことから、ユダヤ教徒やキリスト教徒（のちに仏教徒やゾロアスター教徒も含まれた）は啓典の民として、ジズヤの支払いを条件に信仰の維持が認められた。

設問4 アリーとその子孫のみを正統な後継者と認めるシーア派は、現在イスラーム教徒の約1割を占めており、イランは国民の多数がシーア派である。

設問5 イラン北東部のホラーサーン地方は、アッバース家によるウマイヤ朝打倒の拠点となった。

設問6 インド＝ヨーロッパ語族には、ヒンディー語・ペルシア語などのインド・イラン系言語、英語・ドイツ語などのゲルマン語、ラテン語・フランス語などのロマンス語、ケルト語、ギリシア語、ロシア語などのスラヴ語、バルト語などが含まれる。

アッシリア人・フェニキア人・アムル人はセム語系、ドラヴィダ人はドラヴィダ系の民族である。

設問7 751年のタラス河畔の戦いで、アッバース朝は唐に勝利し、その際に製紙法がイスラーム世界に伝播した。

設問8 トルコ語はアルタイ語族に属し、モンゴル語・ウイグル語・キルギス語・満州語もこれに属する。ソグド語はインド＝ヨーロッパ語族のペルシア語系の言語である。

設問9 オスマン帝国は騎士に対して、軍事奉仕への代償として、指定した土地からの徴税権（ティマール）を与えた。

【7】

解答

A 13 B マムルーク C イル＝ハン D ベルベル E ムワッヒド
F 十字 G 国土回復 H ナスル I アッコン J カイロ
K バグダード L ガザン＝ハン M スンナ N シーア O サファヴィー
P 十二イマーム Q キプチャク＝ハン R チャガタイ＝ハン S ティムール
T サマルカンド

解説

13～16世紀のイスラーム世界を概観した問題。地図で各王朝の勢力範囲も確認しておこう。

- A アッバース朝は1258年、フラグ率いるモンゴル軍の西征によって滅びた。
- B 1250年、アイユーブ朝下のトルコ系マムルーク出身の軍人がマムルーク朝を建て、エジプト・シリアを支配した。
- C フラグは兄モンケ＝ハンの命により1258年にアッバース朝を滅ぼした後、イランを中心にイル＝ハン国を建国した。
- D・E ベルベル人のイスラーム王朝であるムワッヒド朝は、イベリア半島のキリスト教勢力に押されて後退し、1269年に滅びた。
- F～H 十字軍運動と連動して、イベリア半島ではイスラーム勢力の駆逐をはかる国土回復運動が盛んとなった。国土回復運動は、1492年にイベリア半島最後のイスラーム王朝であるナスル朝のグラナダが陥落して完了した。
- I マムルーク朝によって十字軍最後の拠点であるアッコンが陥落し、十字軍運動は失敗に終わった。
- J・K マムルーク朝の首都カイロは国際交易の中心として繁栄し、アッバース朝の首都であったバグダードに代わりイスラーム世界の中心地となった。
- L・M ガザン＝ハンはイスラーム教スンナ派を国教としたほか、宰相にイラン人ラシード＝アッディーンを登用して内政の安定をはかった。
- N～P イラン地方では少数派のシーア派信仰が盛んであり、サファヴィー朝はシーア派の一派である十二イマーム派を国教とした。
- Q キプチャク＝ハン国はモンゴルのバトゥが南ロシアに建てた国家で、早期にイスラーム化した。
- R～T チャガタイ＝ハン国はイリ川からシル川にかけての地域に建国され、14世紀中頃に東西に分裂した。西チャガタイ＝ハン国からティムールが台頭し、サマルカンドに都を置いてティムール帝国を建国した。

【8】

解答

問1 1 c 2 a 3 d 4 a 5 d 6 b 7 c 8 b
9 d 10 c 11 a

問2 b 問3 a 問4 b 問5 c 問6 d 問7 d 問8 c

問9 a

解説

イスラーム史を、人物に焦点を当ててまとめた問題。かなり難しい問題も含まれるが、まずは基本的な問題で落とさないことを重視して取り組んでほしい。

問1 1～4 第4代正統カリフであるアリーは、ムハンマドの従弟で、ムハンマドの娘ファーティマの夫であった。シリア総督ムアーウィヤとの戦いで妥協的な態度をとったとして批判され、ハワーリジュ派に暗殺された。

5～8 サラーフ＝アッディーン（サラディン）はクルド人の武将でザンギー朝に仕えていたが、ファーティマ朝を滅ぼしてアイユーブ朝を建てた。第3回十字軍において、イギリス王リチャード1世はサラディンに対し孤軍奮闘したが、結局は和して帰国した。

9～11 ティムールは1370年にティムール朝を開き、首都をサマルカンドに置いた。中央アジアの大部分を制圧し、さらに西北インドのトゥグルク朝、南ロシアのキプチャク＝ハン国に侵入した。アンカラの戦いではオスマン帝国のバヤジット1世を破った。

問2 『コーラン』には、イエスがムハンマドに先立つ預言者として登場している。

問3 「イスラーム」とは、アラビア語で「神への絶対的服従」を意味する。

問4 ムハンマドはメディナで病没した。メディナにはムハンマドの墓廟が建てられ、メッカに次ぐイスラームの聖地となっている。

問5 ウマイヤ朝の勢力範囲は、西北インドからアフリカ北岸、イベリア半島に至る領域である。小アジアは当時、ビザンツ帝国の支配下にあった。

問6 シーア派では、アリー以後の最高指導者をイマームと呼んだ。

問7 サンチャゴ＝デ＝コンポステラはスペイン西北部の地で、12使徒の1人である聖ヤコブの墓があると信じられ、多くの巡礼者が訪れた。

問8 ドイツ騎士団は第3回十字軍時にアッコで設立されたが、十字軍が失敗に終わった後はバルト海東南方面に植民し、ドイツ騎士団領を築いた。

aのテンプル騎士団は巡礼者の保護を目的に12世紀初頭に設立され、多くの寄進を受けて富裕化したが、14世紀フランス王フィリップ4世によって解散させられ、財産を没収された。bのヨハネ騎士団は第1回十字軍で設立された。十字軍失敗後はイェルサレムから拠点転々と移したが、16世紀にはカール5世から与えられたマルタ島を拠点として活動したため、マルタ騎士団とも呼ばれる。

問9 チャガタイ＝ハン国の都はアルマリクに置かれた。

bのエミールはオゴタイ＝ハン国（近年は存在しなかったとする説が有力）、cのサライはキプチャク＝ハン国、dのタブリーズはイル＝ハン国の都である。

5章 イスラーム文化まとめ

問題

【1】

解答

a 28 b 19 c 14 d 34 e 22 f 45 g 30 h 20
i 17 j 03 k 09 l 33 m 44 n 08 o 40

解説

イスラーム世界の中でも、東方に位置するイランと、西方に位置する北アフリカ・イベリア半島を取り上げた問題。イスラーム諸王朝の成立時期・支配地域・民族系統・宗派は混同してしまいがちなので、問題演習などを通して再確認しておきたい。

- a ニハーヴァンドの戦いは642年、ササン朝が第2代カリフであるウマル（位634～44）率いるイスラーム軍に大敗した戦いである。ササン朝は651年に王が暗殺され、滅亡した。
- b 9世紀に入り、アッバース朝の権威が衰えてくるにつれ、地方政権が自立し始めた。イランでは、ターヒル朝（821～73）から自立したサッフアール朝（867～903）をサーマーン朝（875～999）が滅ぼし、東部イランから中央アジアを支配した。
- c ガズナ朝（962～1186）は、サーマーン朝の мамルーク がアフガニスタンに築いたトルコ系の王朝である。この王朝は10世紀末からインドに十数回にわたって侵入し、その支配域はイラン中央部から西北インドにまで及んだ。また、この王朝が学術やイラン系文芸を保護したことも押さえておきたい。
- d フィルドゥシーは、神話や伝説も含む、アラブ人による征服以前のイラン古代王朝史をペルシア語による大長編叙事詩『シャー＝ナーメ（王の書）』として著した。
- e・f イル＝ハン国は、第7代ガザン＝ハン（位1295～1304）の時代にイスラーム教に改宗し、イスラーム国家体制を整えた。ガザン＝ハンの政治改革を支えたのがイラン人官僚で、宰相ラシード＝アッディーンはその代表である。ガザン＝ハンがイラン＝イスラーム文化の振興にも努め、首都タブリーズはその一大中心地となった。イル＝ハン国では歴史学も発達し、ジュワイニーの『世界征服者の歴史』、ラシード＝アッディーンの『集史』などは、その後のイスラーム史学における模範となった。
- g イル＝ハン国の衰退後、南イランで活躍したハーフィズは、イラン最大の詩人の1人である。彼の叙事詩は広くイランの人々の間で親しまれている。
- h ティムール帝国第3代のシャー＝ルフ（位1409～47）は都をヘラートに遷した。彼は学芸を保護・奨励したので、この地はイラン文化繁栄の中心地となった。
- i ウマイヤ朝の滅亡後、その一族のアブド＝アッラフマーン1世（位756～88）が、イベリア半島に後ウマイヤ朝（756～1031）を建てた。後ウマイヤ朝の都が置かれたコルドバは、アッバース朝の都バグダードと並び、イスラーム文化の西方における中心地となった。最も繁栄していた時期には人口が50万を越えるなど、当時の西欧における最大の都市であり、

その様子はコンスタンティノーブルと比べられた。

- j 後ウマイヤ朝の第8代アブド=アッラフマーン3世(位912～61)は、929年、ファーティマ朝に対抗してカリフを称した。これによって、イスラーム世界では3人のカリフが鼎立することとなった。彼はモロッコを征服するなど、王朝の全盛期を築いた。
- k イブン=ルシュドはコルドバ出身で、ムワッヒド朝(1130～1269)に仕え、コルドバの法官となった。彼はアリストテレスの著作の註釈を著し、ヨーロッパではアヴェロエスの名で広く知られた。
- l ファーティマ朝(909～1171)は、アリーの子孫と称する始祖によってチュニジアに建国され、過激シヤ派のイスマーイル派を信奉し、当初からカリフを称した。シリア・エジプトを占領し、新都カイロを建設した。
- m ムラービト朝(1056～1147)はベルベル人が建てたスンナ派イスラーム王朝で、モロッコのマラケシュに都を置いた。モロッコ・アルジェリアを支配し、さらに後ウマイヤ朝滅亡後に分裂状態となっていたイベリア半島のアンダルシア地方も征服したが、1147年、ムワッヒド朝に滅ぼされた。その後、イベリア半島南部もムワッヒド朝の支配下に入った。
- n イブン=ハルドゥーンはチュニス生まれで、エジプトのマムルーク朝(1250～1517)下のカイロでスルタンに仕えた。教授や大法官を務め、ティムールとも会見している。彼の著作でイスラーム理論歴史学の傑作とされる『世界史序説』では、文明論・社会論を展開し、歴史体系を組み立てようとした。
- o マムルーク朝は、マムルーク出身の将軍が1250年にアイユーブ朝(1169～1250)を滅ぼしてエジプトに建国したトルコ系スンナ派の王朝。モンゴル軍や十字軍を撃退し、紅海貿易を独占して繁栄した。

【2】

解答

- 問A a アリストテレス b イブン=シーナー c ゼロ d ウラマー
e マドラサ f アズハル g ミナレット
- 問B ア イブン=ハルドゥーン イ 千夜一夜物語(アラビアン=ナイト)
ウ アラベスク

解説

イスラームの学問を中心に、文化史をまとめた問題。全問基本的な内容なので、確実に正解したい。

- 問A a イスラーム世界の学問はギリシア哲学の中でもアリストテレス哲学の影響を強く受け、『形而上学』『自然学』『オルガノン』などの著作の研究が勧められた。
- b イブン=シーナーはイスラーム哲学を大成するとともに、医学においても功績を残した。臨床によって病理を分析した『医学典範』は、ギリシア・アラビア医学の集大成とされ、西ヨーロッパの医学へも大きな影響を与えた。

- c インドからゼロの概念と十進法を導入し、インド数字を原型としてアラビア数字が作られたことで、イスラーム世界における数学研究が進展し、フワーリズミーは代数学を発達させた。
 - d 神学・法学を初めとするイスラームの諸学問に通じた知識人・学者をウラマーと呼ぶ。ウラマーはイスラーム法の解釈・執行を担い、裁判官などに就任することも多かった。
 - e ウラマーを育成する高等教育機関をマドラサといい、優れた師を求めて各地のマドラサをめぐる諸学問を修めることで、一流のウラマーに成長するとされた。マドラサは寄進財産（ワクフ）によって運営され、学生は経済的な負担なく教育を受けることができた。
 - f ファーティマ朝期のカイロで建設されたアズハル学院は、当初イスマール派のマドラサであったが、アイユーブ朝期にはスンナ派神学の中心となり、イスラーム神学・法学の最高権威となった。
 - g モスクに付属する尖塔をミナレット（光塔）といい、この上から人間の声によって礼拝の時間が告げられる。
- 問B ア イブン＝ハルドゥーンはチュニス出身の歴史家で、著書『世界史序説』では都市と遊牧民との交渉を中心に、王朝興亡の歴史には法則性があると論じた。
- イ 『千夜一夜物語（アラビアン＝ナイト）』は、インド・イラン・アラビア・ギリシアなど各地の説話の集大成であり、16世紀のカイロでほぼ現在の形となった。
- ウ 植物の茎や葉、アラビア文字などを図案化し、幾何学的に配置した装飾文様をアラベスクといい、建造物・陶磁器・書物などを飾った。